

バッハとモーツァルト

1. バッハの家系

ヨハン・セバスティアン・バッハは1735年に彼自身が著した「音楽家バッハ一族の起源」によると、曾祖父ファイト・バッハ(1577年没)から数えて4代目に当たり、彼の息子たちを入れて5代、53人の音楽家を輩出した空前絶後の家系の生まれです。してみればベートーヴェンが語ったように「バッハは小川(Bach)ではなく大海(Meer)である」というのも当然で、いわば世襲制の伝統芸能の家に育った彼の中にバロックとそれに先立つ時代の音楽技法がすべて流れ込んでいる、と言うことは素直に理解できることです。バッハの時代、音楽は学校ではなく個人授業で、それも親から学ぶのが普通であったようです。その点でヨハン・セバスチアンは特に恵まれた音楽環境であったといえるでしょう。彗星の如く現れた天才と違って、バッハの中には先祖伝来の音楽的才能と過去の作品や技術的蓄積が血肉として存在したわけですね。

長きにわたる音楽家系としてのバッハ一族の頂点はやはり J.S.バッハ親子でしょう。当時の国際的な知名度では彼の息子たち、すなわちヴィルヘルム・フリーデマン、カール・フィリップ・エマヌエル、ヨハン・クリスティアンらは父を遙かに凌いでいましたが、やがて18世紀中頃からは一族の音楽家系としての勢いは衰退しました。

2. バッハが後世に与えた影響

バッハが海であるとすれば、そこはすべての河川が流れ込む場所であるとともに、生命誕生の場でもあります。35億年前に海の中で生まれた地球最初の生命体がやがて地上に進出したように、バッハが受け継ぎ育てた音楽は、彼の世代から今日まで、ドイツの一公国ザクセンから全世界に、時空を超えた影響を及ぼしています。作曲家で言えばモーツァルトは勿論、ベートーヴェン、メンデルスゾーン、シューマン、リスト、ブラームスらの古典・ロマン派からフランク、ヴェーバー、イザイやブリトゥンなど近・現代の人々、さらにはジャズの世界にも広がってルイス(モダンジャズ カルテット(MJQ))等々、枚挙にいとまがありません。彼らはバッハの使った作曲技法、とりわけフーガやカノンに代表される対位法、遙か昔ベネチアのサン・マルコ大聖堂オルガニストであったガブリエリに発して、バッハがモテットや「マタイ受難曲」で最後の花を咲かせた二重合唱などの手法を用いてヴァイオリン、オルガン、管弦楽、合唱用の音楽を作り、さらには素材としてグレゴリア聖歌やコーラルの旋律を用いたり、バッハ自身が「フーガの技法」で実行したように、彼の名前を音名に見立てて(B,A,C,H すなわちシ、ラ、ド、シ)これを主題とするなど、その影響は多岐にわたっています。

もう一つ忘れられないのはバッハ作品の復活です。と言うのも彼の死後、古典派の時代にバッハは忘れ去られた存在だったからです。自身はドイツ国内から出たことがなく、生前出版された楽譜がわずかだったことも原因でしょうが、この時代ポリフォニー音楽はすでに過去の遺産でした。当時バッハと言えばロンドンで活躍し、モーツァルトとも面識のあったヨハン・クリスティアンの事でした。従ってモーツァルトの「バッハ体験」は希有な出来事だったわけです。バッハ作品の復活はロマン派の時代になってからのことで、きっかけはメンデルスゾーンによる「マタイ受難曲」の復活上演(もっともこの時には今から考えると不必要な改変が行われましたが)でした。ロマン派から近代に至るまで、一般的にバッハの音楽と言えば彼の存命中からその楽器の卓越した演奏家としても

有名であったオルガン音楽であり、それに続く鍵盤楽器用の音楽以外、とりわけ声楽曲はほとんど演奏される機会がなかったようです。勿論そのような時代にあっても、バッハが勤めていたライプツィヒ聖トーマス教会では伝統的にバッハのカンタータやモテット、受難曲の演奏が続いていて、現在に及んでいます。その伝統は第二次大戦後、リヒターにおいて一つの頂点を極めました。すなわち大規模な合唱と現代楽器によるオーケストラで演奏されるバッハです。20世紀後半からは楽譜や楽器の時代考証が進み、レオンハルトとアーノンクールが主導したバッハ時代の楽器やピッチ、編成・規模を用いる演奏が主流となっていることはご存じの通りです。それ以前、20世紀初頭にランドフスカがチェンバロで「平均律クラヴィア曲集」を蘇演して以来、バッハの鍵盤用音楽の演奏はチェンバロによるものが普通になりました。カザルスは忘れられていた「無伴奏チェロ組曲」を発掘・演奏し、チェロが独奏楽器であることを世に知らしめ、今やすべてのチェリストがこの曲をレパートリーにしています。チェンバロ協奏曲として残された楽譜から、失われたと考えられるオリジナルの協奏曲(独奏楽器はヴァイオリン、オーボエ、フルート等)を考証によって復元するという試みも行われました。

バッハ・トランスクリプション(編曲)も古くから行われてきました。元々バロック音楽は楽器も種類や編成にこだわらないことが多く、現にバッハ自身もヴィヴァルディのヴァイオリン協奏曲集「調和の靈感」をオルガン独奏用に編曲しています。バッハのオルガン曲のピアノやオーケストラへの編曲は多くの作曲家や指揮者の興味を引くようで、古くはリストやブゾーニ、ストコフスキーらが試みしています。また「管弦楽組曲第3番」のアリアはウィルヘルミによってヴァイオリン独奏用に編曲され、「G線上のアリア」として有名です。ピアニストのケンプは自身オルガニストでもあることからバッハのオルガン曲を数多くピアノ用に編曲して演奏しています。ギタリストのセゴヴィアは「無伴奏ヴァイオリンパルティータ第2番」の有名なシャコンヌをギター用に編曲して演奏し、その後多くのギタリストにとって欠かせぬ演目になりました。「スウィングル・シンガーズ」というコーラスグループをご存じですか？1960年代に「Jazz Sebastian Bach」というアルバムでデビューし、全曲バッハ作品をスキヤット(いわゆるダバダバコーラス)で歌って話題になりました。70年代にはその頃開発されたシンセサイザーを使った「Switched on Bach」も衝撃を以て迎えられました。ルーシェ「Play Bach」シリーズ、MJQ「Blues on Bach」他はジャズの即興演奏に彩られています。筆者はつい最近、日本のグループ「ブルーオーロラ・サキソフォン・カルテット」によるオール・バッハ・プログラムの演奏会をTVで見ました。「マタイ受難曲」のアリア「主よ憐れみたまえ」から「トッカータとフーガニ短調」、「ゴルトベルク変奏曲」まで何の違和感もなくバッハの音楽そのものとして楽しむことができました。

3. モーツァルトはバッハから何を学んだのか

つつい前置きが長くなりました。ここからが本題なのですが、すでに紙数が尽きてしまいました。すみません(平伏)。続きは次号でお話しすることと致します。

【後記】 訂正(加筆)があります。

第8号「ハ短調ミサ曲はどのようにして書かれたのか-4」の1頁、6. 未完の理由中、以下の文章に赤字で示す文言を追加させていただきます。

それでも聖体拝領を祭儀の頂点として、回心の祈り・主の祈り、旧約聖書、書簡や福音書の朗読、入祭唱・詩編唱・アレルヤ唱・叙唱、記念唱・栄唱・拝領唱、閉祭唱などの歌(現代日本のカトリック教会で行われる歌唱ミサ(Missa in Cantu)の場合)に加えて、もし「完成されたハ短調ミサ曲」が演奏されたとしたら、ミサの時間はどれほど長くなってしまふことか。

(新井)